

# 令和7年度版「学力向上ポータルフォリオ(学校版)」【植水小学校】

⑥	次年度への課題と学力向上策
知識・技能	基礎的・基本的な知識・技能の定着において児童間の個人差が大きく、理解が進んでいる児童とそうでない児童の二極化が見られる。この課題を解消するため、次年度は学習状況の把握と個別最適な支援をさらに充実できるようにする。 まず、単元ごとのテストや朝学習の結果を活用し、児童一人ひとりのつまずきにに応じた課題を提示するなど、反復学習の個別化を進める。また、既習事項の定着が進んでいる児童には応用問題や探究的課題を設定し、学習内容に応じた負荷調整を行うことで、学びの保障と意欲の維持を図る。 さらに、振り返りにおいては「どこでつまずいたか」「次に何をすべきか」を具体的に書けるように改善し、学習の見通しと自己調整力を育成する。学年内で学習状況を共有し、指導の重点化を図ることで、基礎事項に課題がある児童への支援を一層強め、個人差の縮小を目指す。
思考・判断・表現	教職員アンケートの結果から、学習場面における児童の表現力が弱い傾向が見られた。発表や話し合いの場面で、自分の考えを理由とともに述べることに自信がでない児童が一定数おり、学習過程を言葉で説明する力が十分に育っていないことが背景にあると考えられる。 このため、次年度は個人思考の時間を確保するだけでなく、対話を通して考えを比較・問い返し・修正する活動をさらに充実させ、考えを筋立てて表現する力を育成していく。ICTやワークシートの活用により思考の過程を可視化し、友達との意見交換を通して「自分の考えをよりよいものにする」経験を積み重ねる授業づくりを推進する。これらにより、互いの理解を深めながら納得感を見出せる協働的な学びを一層充実させることを目指す。

①	今年度の課題と学力向上策	
	学習上・指導上の課題	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	<学習上の課題> 単元内では、基本的な内容の理解・習得はできているものの、学習内容が長期的に定着せず、次の単元や場面でも活用できない児童が見られる。 <指導上の課題> 当該学年以外の内容を補う指導や、既習事項の定着を図る時間の確保が難しく、系統的な学びにつなげにくい状況にある。	⇒ 1. 既習事項の定着を図る反復・活用学習の充実 活用学習を繰り返す学習や「準備時間」に活用することで、知識の整理と定着を図る。【毎単元末】 朝学習(朝・算タイム)を活用して、つまずきの多い児童の反復演習に取り組み(週1回程度)。 2. 振り返りの充実 振り返りを通して、児童自身が「わかったこととわからないこと」に気づき、教師が適切な支援を行えるようにする。【毎時間】 3. 学習状況の定期的な把握と分析 単元ごとのテストや単元テスト後の分析を定期的に行い、つまずきやすい内容を学年内で共有し、対応を図る。【テスト及び学習状況調査後】
思考・判断・表現	<学習上の課題> 難しい問題に直面した際に粘り強く考え続けることができず、すぐに諦めてしまう児童が見られる。 <指導上の課題> 知識・技能の定着を優先するあまり、児童が自分の考えを深めたり、根拠をもって表現したりする場を十分に確保できていない。	⇒ 1. 自分の考えをもつための思考の時間を確保 問題に対して、「まずは自分で考えてみる時間(個人思考)」を確保する。【毎時間】 ワークシートを活用し、自分の考えを書く・比べる・修正する機会を設ける。【毎単元】 2. 協働的な学びによる思考の可視化と深化 ICTの共同編集機能等を活用して、考えの過程を見える化し、児童同士で考えを共有・比較・統合する場をつくる。【毎単元】 3. 言語活動の充実 言語活動を中心に、自分の考えを言葉で説明する「書く」活動を継続的に取り入れる。【毎単元】

⑤	評価(※)	学力向上策の実施状況
知識・技能	B	・適用問題やドリル学習等を継続して行ったことで、既習事項の定着が進み、単元テストでの基礎問題の正答率が向上した。また、朝学習において週1回の朝・算タイムを設定し、つまずきの多い内容を反復して扱うことで、理解が不十分だった課題の習熟が見られた。 ・毎時間の振り返りで「わかったこと・わからなかったこと」を明確に書くことを指導した結果、児童が学習のつまずきを言語化しやすくなった。振り返りの内容をもとに個別支援を行うことで、支援が必要な児童へのフォローにつなぐことができた。 ・各学習状況調査結果を分析し、つまずきやすい内容を学校間で共有して指導に反映したことで、学年の指導の共通理解が深まった。
思考・判断・表現	B	・毎時間、問題に対してまず自分で考える個人思考の時間を確保したことで、自分の考えをもつ意識が定着した。各単元に必要に応じてワークシートを活用し、自分の考えを書く・比べる・修正する活動を行ったことで、考え方の変化を自覚しながら学習に取り組む児童が増えた。 ・ICTの共同編集機能を活用した場面では、児童に考えを共有・比較できる場をつくったことで、思考の過程が可視化され、友達の見解を参考に自分の考えを深める機会が多くなった。 ・国語や算数を中心に、自分の考えを「説明する」「書く」言語活動を継続的に取り入れた結果、自分の考えを根拠とともに表現しようとする児童が見られた。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

②	全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	(国語)問題文を引用して自分の考えを書く記述式の問題に課題が見られた。無回答の児童が多く、自分はどういう考えをもっているのか、また、自分の考えと似ている文章はどれかを探し、どのように書きたりしたので悩む児童が多いのではないかと、さらに、適切な文を引用することができていない様子から、文章中の語彙の理解力と文章を正確に読み取る力が不十分と考えられる。(算数)数直線上に示された数を分数で書く問題に課題が見られた。単位分数の読み取り間違いによって大きく正答率を下げてしまったので、分数の意味をしっかりと理解できるように、低学年では、具体物を使って実際に分ける体験を行わせたり、絵や図を用いた視覚的な支援をどの学年でも繰り返し指導していく。
思考・判断・表現	(国語)インタビューの問題やメモの取り方などの問題で課題が見られた。今までの言語活動や生活経験と結び付けて想像し、答えを導くことができていると考えられる。国語の教科以外でも、児童自身が直接体験する活動を充実させ、自分の思いを表現する時間を設けていく必要がある。(算数)使いかけのハンドリーフがあと何ページかを調べるために、必要な事柄を判断する問題に課題が見られた。このような問題の形式に慣れていないことも理由に挙げられるが、授業でも、答えの求め方を式や図、言葉などを用いて記述したり、友達に実際に伝えてみたりする活動を大切にしていける必要がある。

- ①結果分析(管理職・学年主任等)
- ②詳細分析(学年・教科担当)

④	さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	(国語)国語の知識・技能では、漢字・指示語・敬語で課題がみられる。漢字については語彙の意味理解が不十分で、熟語を構成する漢字の意味が結び付かず、音訓の暗記に偏りやすい傾向がみられる。指示語は段落構造を捉える力が弱く、文章のまとまりを踏まえた指示内容の判断が不安定である。敬語は話し手・聞き手の役割関係の理解ができず、使用経験の少なからず文脈に応じた使い分けが難しい。そのため、漢字の意味のつながりを意識させる学習、段落構造の視覚化、役割関係を整理する敬語指導を中心に行う必要がある。(算数)中学算数では計算手順や数の概念の理解が十分でなく、数の操作は十分に習得しているが、数値の状況整理して考える力や量感や割合に切っていない傾向が見られる。一方、高学年では、図形の学習が性質の丸暗記に偏りやすく、補助線や根拠に基づいて構造的に捉える力が不足していること、また割合では基準量・比べる量・割合の三量関係の理解が曖昧で、状況に応じた意味づけが安定していないことが課題としてあげられる。
思考・判断・表現	(国語)目的に応じて情報を整理し、関係づけて理解・表現する力に課題がみられる。まず、文脈に応じて「言い切る/伝聞で述べる」といった表現のスタンスを選ぶ判断が不安定である。また、資料を読み比べる場面では、「何を知りたいか」という読みの目的意識が弱く、必要な選択や重要情報を見付け出すのに課題がある。さらに、文章の要点整理が不十分のため、文章と資料を比較・統合する読み課題がみられる。加えて、インタビューなどの会話文では、質問者と回答者の役割や取りの構造といった会話の仕組みの理解が不足しており、話し方の工夫や意図を読み取る力が十分に育っていない。読みの目的を明確にする指導、要点メモや図式化の活用、会話の役割関係の図式化を意識していく必要がある。(算数)全学年を通じて、あまりの処理、単位変換、グラフの読み取り、図形の情報把握、割合の意味理解といった領域に共通して弱さが見られる。あまりの処理では、場面に応じて「切り上げる・切り捨てる」そのまま使うといった判断が十分にできていない。また、単位変換については量に関する具体的な経験が乏しいために根拠が不明確なままの処理になりやすい傾向がある。グラフでは、特に複合グラフにおいて縦軸の単位や目盛の読み取りでつまずきが見られた。図形では垂直・平行・底面積などの根拠となる情報や目盛の読み取りが不十分である。割合については、増減の意味や変化のとりえ方が曖昧で、状況に応じて考え方を使い分ける力が十分に育っていないことが課題として挙げられる。

③	中間期報告		中間期見直し
	評価(※)	学力向上策の実施状況	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	B	毎週月曜日を「国語・算数タイム」とし、全学年で国語と算数の基礎学力向上のための時間を確保し、行うことができる。一部の児童には自主学習の取り組みに差があり、得意分野にばらつきが見られる。今後は個別に取り組み内容の調整や声かけを強化する。	変更なし
思考・判断・表現	B	課題に対し、自分の考えをもって取り組む姿勢が高まってきた。特に個人思考の時間には、図や言葉を使って自分の考えを表現する児童が増えている。また、指導の個別化が進み、児童が自分合った学び方を選択できるようになったことで、自然に深い対話が生まれる場面も多くなった。一方で、他者の考えを根拠をもたずにそのまま取り入れてしまう児童もおり、自分の考えの深まりに二極化が見られる。	変更なし

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)